住まい「裏から表へ」

小澤誉子

最近、住まいで注目を浴びている空間にキッチンとトイレ・バススペースがあげられる。昔、それらの空間は、北向きにあり、住まいとしては、あまりすばらしい位置にはなかった。それらは、どことなくジメジメとし、また、玄関、客間などを表とするなら、それらは、あくまで裏であり、他人の目に触れることをできる限り避ける陰のスペースなのである。その陰のイメージをより強めるかのように、窓は小さく、昼間でも、どことなく闇をイメージさせるような所があった。

子ども達は、夜、それらの陰なるスペースに近づくことに、恐れを抱いた。朝の活気はすでにかたづけの完了した台所にはなく、ただ、明日の朝を待つ、まるで眠るがごとき静けさがそこに漂っていたのである。風呂場もトイレも、子どもにとってひとりでは近づきにくいスペースだった。何か、わけのわからぬ者がそこに存在しているように思え、夜中は、とてもひとりで行けない場所である。

これらのスペースは、人間の生活になくてはならない重要なものであるにもかかわらず、従来、そこは、水場という一種ジメジメした陰質な空間であるイメージが抜けず、住まいにおいて、裏なる位置におかれていた。

ところが、最近、今まで、裏におかれていたこれら空間が、反対に、オープンの空間へと変わりつつある。北側から、それらの空間は、住まいにおけるより表の場所へと移動しつつある。

閉された空間であったキッチンは、家族との共通スペースであるリビングルームにドッキングし、主婦は家族の顔を見ながら仕事ができるようになった。子供は、母親の働く姿を、くつろぎながら見ることができるのだ。キッチンのようにパブリックスペースに、組み込まれることはなくても、より裏の部分から表に移動したのが、バスとトイレである。

住まいの全体スペースから見ても、かつてより、バスとトイレのスペースは確実に広くなっている。ユニットバスというすべてをひとまとめにしたコンパクトな形は、マンションやアパートのきわめて狭い空間しかもたないものに多くを見られる。しかし、一戸建住宅に、ユニットバスを好む傾向は薄れている。つまり、狭いバス・トイレより、より広く快適な空間を人々は求めているといえよう。

今や広々としたバスとやはりゆとりを感じさせるトイレは、人々の憧れとなっている。なぜ、バスやトイレが、これほど注目を浴び始めたのだろうか。それは、ひとつには健康ブームの影響が考えられる。つまり、人の健康とこれらのスペースは、切っても切れな

い関係があるのだ。トイレは、必ず日に何回か使用し、健康をチェックする所である。最近、トイレに、即、尿検査や血圧まで測れるコンピューターを導入したものまで出ている。誰もが、ある時間をすごすスペースが、より快いものであることを望むのは、ごく自然なことである。また、トイレが明るい表の空間になったことで、子供にとって、こわい場所ではなくなってきた。かつて、小さな豆電球がわずかな明るさを示し、便器の前には、小さな窓があるトイレが多かった。私なども子供の頃、夜、その小さな窓がスーとあいて誰かの手がニューと出て、足をつかまれたらどうしようと、かなりこわい思いをしたものだった。また、トイレにまつわるこわい話も多かったのだ。しかし、今やトイレには、窓がなくなりつつある。そして、明りは、40Wなど、リビングルームと同じように明るくなり、内装の色もカラフルとなって、こわい話など生まれにくくなっている。子供にとって、もはや、トイレは、こわい空間ではなくなっているのだ。

また、バスについて考えてみても、健康のために、バスを有効に使おうという企画がどこの雑誌にも特集されるほどだ。そして、最近の温泉ブームで、家庭でも温泉と同じ効果のある沐浴剤が売られ、人気をえている。忙しく働く人々にとって、バスにゆっくりとつかり、一日の疲れをとるのは、必要なことであり、体と心をリラックスさせる空間としてバスの果す役割は、年々注目の度合を高めている。

また、シャワーの普及により、若い人々のバススペースを使う回数が増えている。毎朝、起床の後のシャワーは、多くの人々の実行する所であり、朝のシャンプーも、多くな

っている。夏、汗をかけば、即シャワーを浴びるのが、若い人にとっては、当り前になりつつあるのだろう。

昔、朝風呂は、ひとつのぜいたくといわれていた。朝風呂は、体をリフレッシュさせる効果があり、頭もスッキリする。しかし、それは、かつてぜいたくなことであった。今や、朝のシャワーは、朝風呂と同じく、リフレッシュさせるために、生活の一部となっている。中学生、高校生でも、朝シャワーを使う人数は、増えている。

使用回数の増加したスペースが、より快適なものであることを望むのは、当然なことだといえよう。バス関係の物を売る店が、経営の成り立つのは、それだけ、人々の関心がバスに対し高いためである。

時代の流れとともに、住まいのあり方も変わってゆく。従来、日本家屋にあった明確な表と裏の概念は、今、変わろうとしている、いいかえれば、裏の部分が、減っているといえる。

裏の概念が稀薄になるにしたがい、人々の住まいへのかかわり方もおのずと異ってくる。住まいにかつて多く存在したコワイお話は、もはや生まれなくなってしまった。子どもと住まいのかかわり合いは、かつてよりドライなものとなり、思い入れもうすくなってゆくのである。